

キノコが生えた男の子

森のなかに、
大きな大きな木が倒れていました。

わたしは、なぜか、

その木の下に、くっついていたので。

離れようと思っても、どうしても離れられません。

まるで木にびつたりと吸いついているかのように、
まったく身動きがとれないのです。

わたしは、昼も夜も、泣きつづけました。

泣きながら、助けを呼びました。

けれども、だれもやってきません。

わたしは、だんだん弱り、

泣き声も、か細くなつていつて

いままではもう、虫の音のよう。

助けを呼ぶ声も、

風の音にかきけされてしまいます。



目の前で、季節がぐんぐん移りかわっていきます。
秋には、赤く色づいた木の葉がわたしの上に散り、
その色があせるころには、白い雪が降りつもります。
雪がとけると、つららができてキラキラと光り、
それもとけて春になると、草たちの種が芽生えます。

わたしの体は、淡い緑や濃い緑の苔で、
すっかり覆われてしまいました。

夏になると、そこに、草が、ぼうぼう生えてきました。

草は小さな花を咲かせ、実を实らせ、

秋になると、実を落として枯れていきました。

すると、こんどは、たくさんのキノコが生えてきたのです。

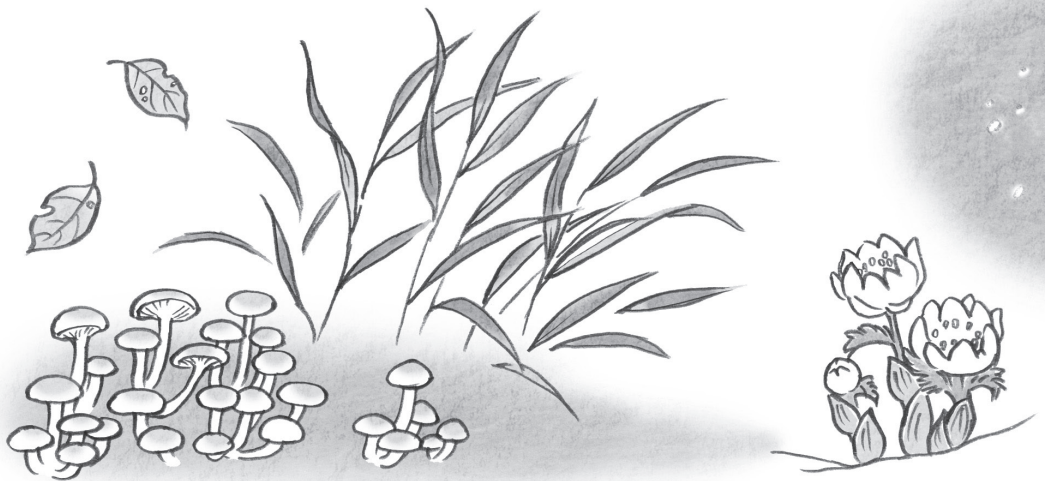
わたしの体は、色とりどりのキノコでいっぱいです。

もう人だかなんだか、わかりません。

虫や小さな獣たちがやってきて、キノコを食べると、

あとから、あとから、

また、キノコが生えてくるのでした。







そしてまた、夏がめぐってきたときのことで、
人がやってくる気配がしました。

川伝いに、森の奥へはいつてきたようです。

わたしは、なんとか目玉だけでも動かして、

その人を見ようと思いました。

それは、荷物を背負った女の人でした。

その人は、わたしのすぐそばまで来ると、

ふいに、わたしに背中を向けてしまったのです。

わたしは、気づいてほしくて声をあげようとしたが、
喉いっばいまで苔むしていて、声も出ません。

ああ、このまま気づいてもらえずに、

置きざりにされるのだろうか、

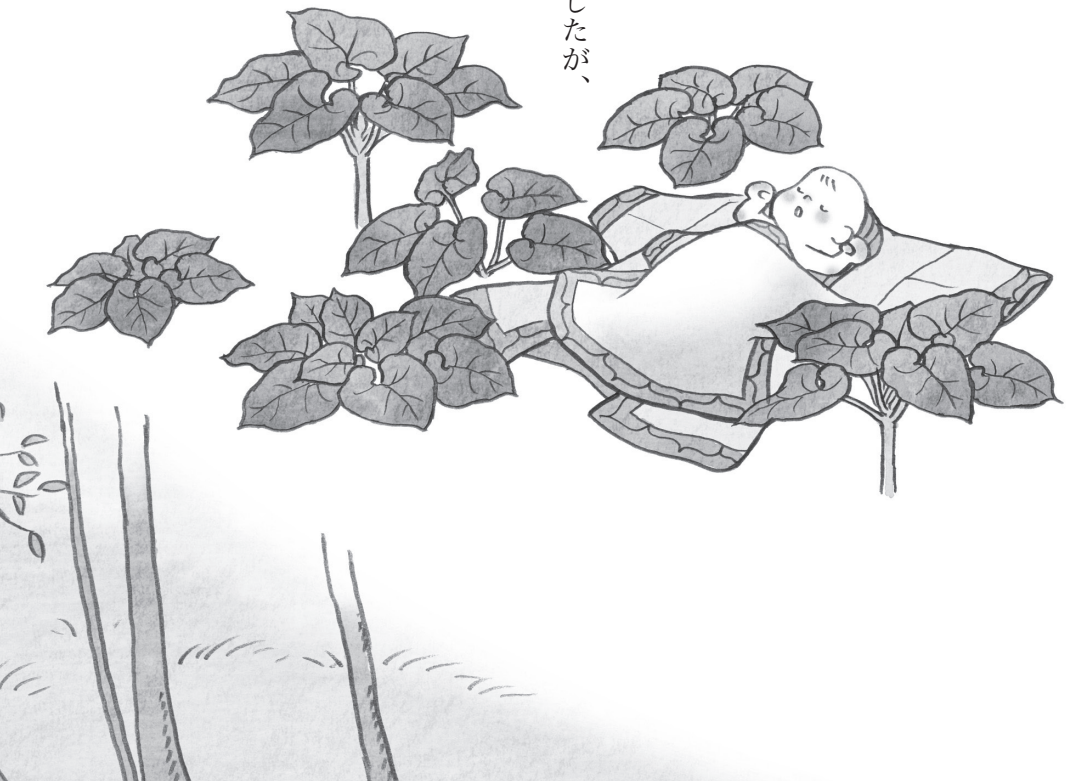
また一人きりになるのだろうか、と思ったとき、

その人がこちらを振りむいたのです。

そして、こんなことを語りはじめたのです。

「どうか、わたしの話を聞いてください。

わたしは、あなたがまだほんの幼な子だったころ、



あなたを背負つて、森にウバユリを掘りに来たのです。

わたしは、自分の着物を脱いで、そこにあなたを寝かせました。

そして、いつしようにけんめい、ウバユリを掘っていたのです。

わたしは夢中で掘りました。

ウバユリの根は、大切な食べ物になります。

ところが、ふと振り返ると、あなたがいません。

わたしは、まつ青になつて、あなたの名を呼び、

そこらじゆうを、探しまわりました。

もしや、川に落ちたのではと、川をのぞき、

木の洞で眠っているのではと、洞ものぞいてみましたが、

それでも、どうしても見つかりません。

泣きながら家に帰ると、おとうさんもまつ青になり、

いつしよに森へ行つて、探してくれました。

二人で何日も何日も、森を歩きました。

月が欠けては満ち、欠けては満ちるのを、

いったい何度くり返したでしょうか。

それでも、あなたを見つけられず、

わたしは泣いて泣いて泣いて、泣き死んでしまいました」



わたしはびつくりして、その人を見ました。

「おかあさん」と叫びたかったのですが、声がでません。わたしは、目だけで、必死に思いを伝えました。

「ごめんなさいね、わたしの坊や。

わたしはもう、生きてはいないので。

死んで魂になったので、こうしてようやく、

あなたのところへ来ることができたのです」

おかあさんは、ぼろぼろと涙を流しました。

「死んで、はじめてわかったことがありました。

沼地の魔女が、わたしたちのしあわせを妬んで、

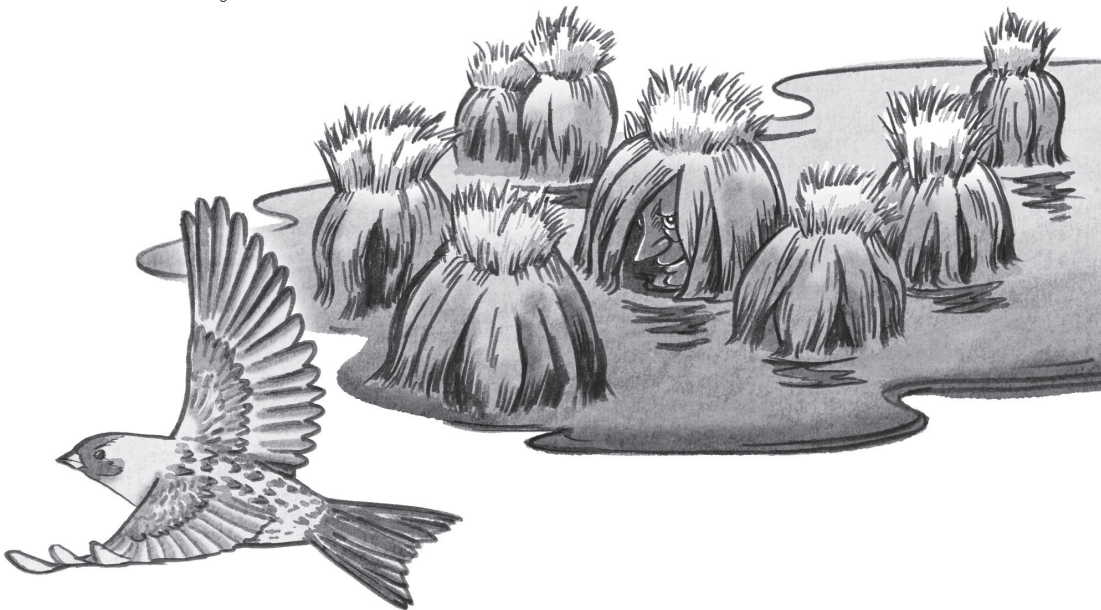
あなたのことを隠してしまつたのです。

幼い子どもが、こんな木の下に隠されて、

ふつうの人なら、とても生き延びられません。

それでも、あなたが命があるのには、深いわけがあるのです。

あなたが生まれる少し前のことです。



村に、渡り鳥の姿をした疱瘡のカムイがいらつしやいました。
カムイは、村の家々をめぐり、

わたしの家の屋根におとまりになりました。

そのとき、カムイが、わたしを見て、つぶやかれました。

『ああ、なんといい美しい女だろう。』

まるでカムイのように美しいこんな女を、

妻にしてみたいものだ』

ただそう思われただけなのですが、ほかならぬカムイの思いです。

地に落ちて消えたりはしません。

思いはわたしのお腹に宿り、あなたが生まれたのです。

ですから、あなたは、半分は人、半分はカムイ。

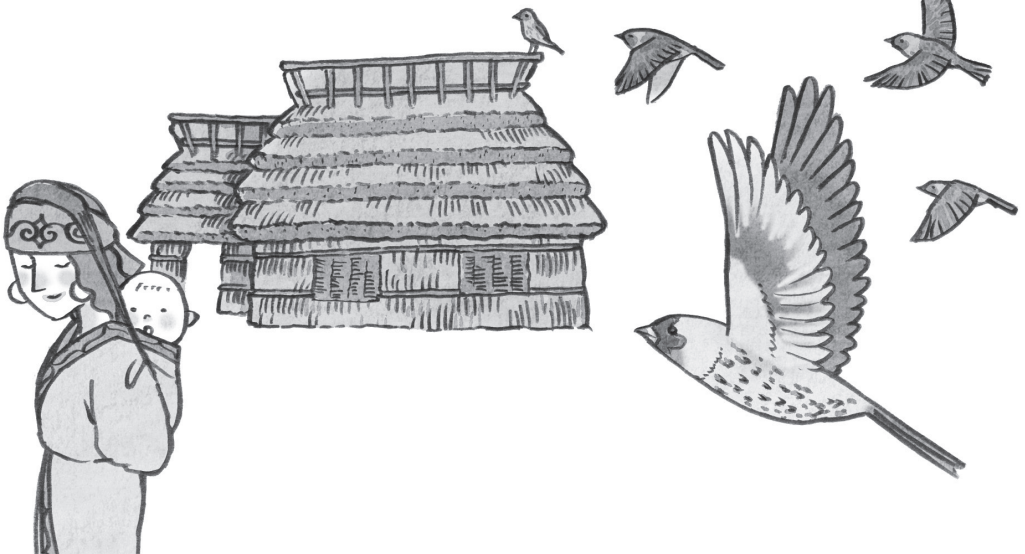
だから、こんなひどい目にあつても、命があるのです』

そうなのかと、わたしははじめて合点がきました。

「あなたを助けてあげたいのは、やまやまです。

けれども、死んでしまつたいま、

魂だけになつたわたしには、どうすることもできません」



おかあさんは、また、さめざめと泣きました。
わたしの目からも、ぽろぽろと涙がこぼれます。

「わが子よ。死んで魂になつてしまつたとはいえ、
こうしてあなたにもめぐり会えたので、
わたしはもう、地上を去ろうと思います。

そして、死者たちの赴く国に行きます。

その前に、これからあなたの身に起こることを
お話しておきましょう。

いいですか、じきに、夏の大嵐がやつてきます。

野にも山にも、たいへんな雨が降ります。

六日六晩、雨は、昼も夜もなく降りつづけ、

やがて、山から水が溢れだし、

おそろしい山津波がやってくるでしょう。

それは、大波のように岩を巻きこみ、木をなぎ倒し、

ごうごうと音を立てて、この森を襲うでしょう。

あなたもまた、この木とともに押し流されます。

でも、こわがつてはいけません。



ただ、流れに身をまかせなさい。

水は、あなたを川へと運んでくれます。

川の流れは、やがておだやかになり、

あなたは、岸辺に打ちあげられるでしょう。

すると、犬がやってきて、あなたに吠えかかるでしょう。

でも、こわがってはいけません。

犬が、昼も夜も吠えつづけるものだから、

やがて、人々が、なにごとだろうかと見にきます。

そして、苔だらけ、キノコだらけのあなたを見て、

おそれをなして、逃げていきます。

でも、心配することはありません。

逃げ帰った人々のうわさ話が、人から人へと伝わり、

やがて、あなたのおとうさんが、

それを聞きつけるでしょう。

そして、きつとあなたのもとを訪れるでしょう」

そういうと、おかあさんは、

淡い光を放ち、霧のように消えてしまいました。



わたしは、その日を心待ちにしました。

何日かすると、空がにわかには灰色の雲におおわれ、

おかあさんの予言どおりに、はげしい雨が降りだしたのです。

六日六晩、雨は、昼も夜もなく降りつづけ、

やがて、山から水が溢れだしました。

なにかがゴツゴツぶつかる音がしたかと思うと、

はげしい地響きがして、山津波がやってきたのです。

大波が、岩を巻きこみ、木をなぎ倒し、

わたしのほうへとせまってきました。

あつと思うと、わたしは黒い大波に巻きこまれ、

そのまま、気を失ってしまいました。

それから、どれくらいしたのか、

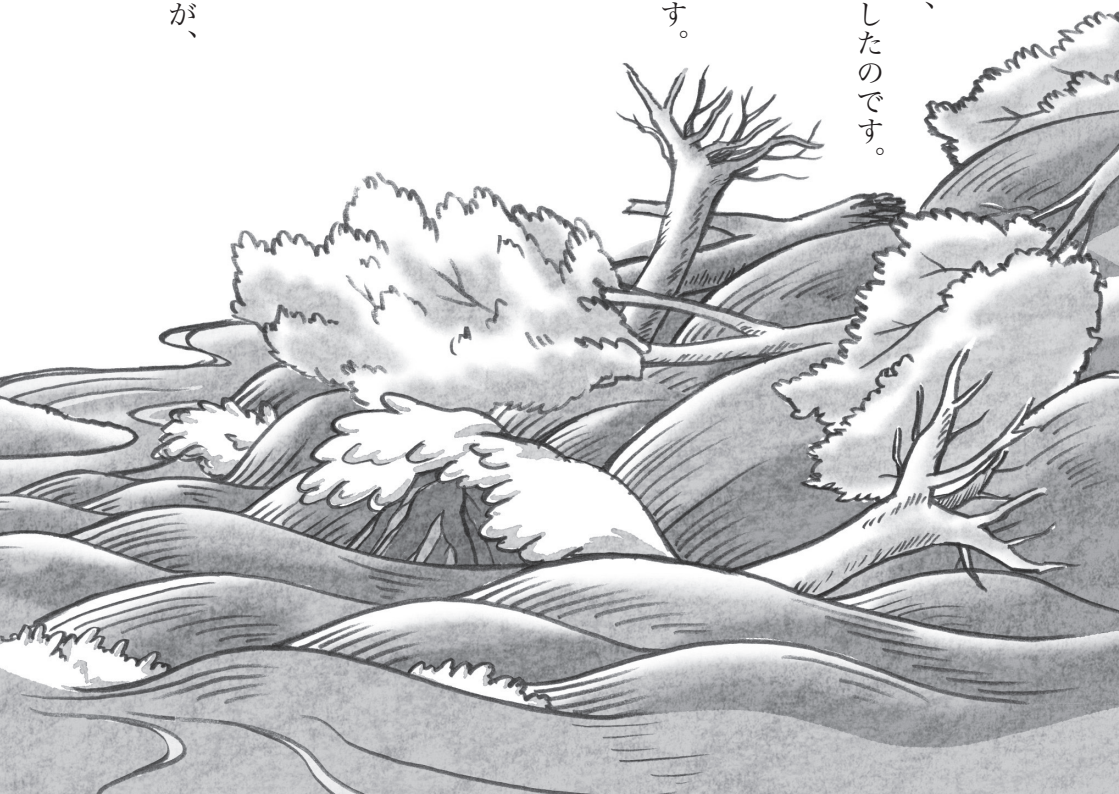
気がつくと、わたしは川に浮かんでいました。

あたりには、山津波で流された木が浮かび、

岩にぶつかりながら流れていきます。

わたしも、いつぶつかるかと、ひやひやしましたが、

なぜか、木は岩をよけるように進み、



やがて、広々した場所へと出ました。

ゆらゆらと波に揺られているうちに、

岸辺に寄りあがりました。

ほどなくして、犬がやってきて、

匂いを嗅ぎながら、近寄ってきました。

かつと目を見開くと、犬はおどろいて後ずさり、

火のついたように吠えだしました。

そのまま、いつまでも吠えやみません。

その声を聞いて、人々が集まってきました。

遠巻きにして、わたしを見ていましたが、

わたしが、目玉をぎろつと動かすと、

みな、叫び声をあげて、逃げていってしまいました。

とうとうまた一人になってしまいました。

おかあさんのいうように、ほんとうに、

おとうさんは来てくれるでしょうか。

不安に思いながら、ただ波に洗われていると、

やがて、一人の男の人が、やってきました。

ああ、あれがおとうさんでしょうか！



その人をよく見ようと、わたしは目玉を大きく開きました。

髭はのびほうだい、髪も肩までのびて、ひどくやつれたようすです。目は、泣きはらしたようにまつ赤にうるんでいます。

しかし、もとはずいぶん美男だったのでしよう。

こんなようすでも、そう思わせるきれいな顔立ちです。

その人は、いちもくさんに駆けよつてきました。

そして、大きく見開いたわたしの目玉を見ると、

わたしの頭から足の先までじろつとながめ、

いきなり、くるつと背を向けたかと思うと、

なにもいわずに、走りさつてしまったのです。

「待つて、おとうさん！」と呼びたかったのですが、声が出ません。わたしはまた、一人ぼっちになつてしまいました。

ああ、このまま一人で死んでいくしかないのか、

とがっかりしていると、さっきの男の人が、

マサカリをかついで、すごいいきおいで走つてきました。

そして、わたしのところまで来ると、

マサカリを高く振りあげました。



木に張りついたわたしは、逃げることもできません。

ああ、もうだめだ、おしまいだ、と思つたとき、
体がふわつと浮くような気がしました。

目を開けてみると、なんとわたしは、木から離れていたのです。

その人が、マサカリで、木から剥がしてくれたのでした。

そして、わたしを抱きかかえると、

川のなかに連れていきました。

川の水にわたしを浸し、ゆつくりゆつくり、

わたしの体に生えた苔やキノコを、剥がしとつてくれたのでした。

苔とキノコの塊に目玉がついた化け物のようなわたしの体は、

だんだんと元の姿をあらわしていきました。

すつかりきれいになると、その人はわたしを川から引きあげ、

川岸にたくさんのイナウを立てて、カムイたちに祈りを捧げました。

それから、葦の束をいくつも作り、それを地面に立ててずらつと並べると、

そこに火をつけたのです。そして、わたしをつかんで燃える葦の下をくぐらせてくれました。

そうやって、わたしについていた魔物を取りはらってくれたのです。

そのおかげで、わたしはすつかり、

人間らしい姿にもどることができたのです。



その人は、わたしを家に連れ帰りました。
そして、泣きながら、こんな話をしてくれたのです。

「森のなかでおまえを見失ってしまったとき、

わたしとおかあさんは、泣いてばかりいた。

くる日もくる日も、泣いて泣いて泣いて、

おかあさんは、とうとう泣き死んでしまったんだ。

わたしは、妻も息子も失って、たった一人になり、

それからもずっと、泣きくらしていた。

きつと、わたしもおまえのおかあさんのように、

いつか泣き死んでしまうだろう、と思っていた。

ところが、こうやってまた、おまえと巡りあうことができた。

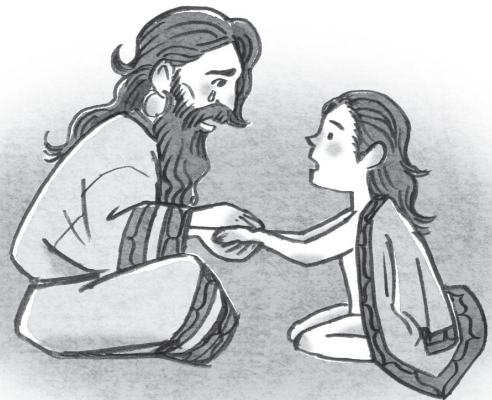
なんとうれしいことだろう。

カムイが人間を守つてくださるといふのは、

まったく、ほんとうのことなんだなあ。

おまえは助かり、わたしももう泣き死にしないですむ」

わたしは胸がいつぱいになり、



なんとか声をだそうとしました。

すると、のどに詰まっていた苔やキノコがぼんと飛びだし、

「おとうさん」と声が出たのです。

わたしたちは、抱きあつて喜びあいました。

涙が流れましたが、それはよろこびの涙でした。

それから、おとうさんはわたしを大切に育ててくれました。

わたしはすすくすすく育ち、やがて一人前になつて、

一人で鹿や熊もとれるようになりました。

ですから、どしどしとつて、おとうさんに食べさせてあげました。

けれども、わたしがいない間に、泣きすぎて体を悪くしたおとうさんは、

まだまだ老いさが長いのに、わたしが妻をめとるのも見ずに、

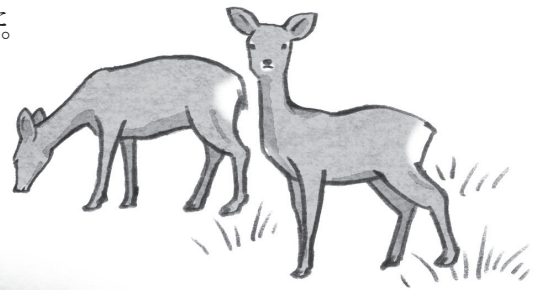
亡くなつてしまいました。

それからしばらくして、わたしはとてもしとやかな、

気立てのいい女と結婚しました。

けんか一つせずに仲むつまじく暮らし、

子どもも、二人、三人と、増えていきました。



わたしたちは、子どもを大切に育てました。

さいわい、どの子ども、森のなかで消えてしまうことも、悪い病気にかかることもなく、元気に育ちました。

すくすく育つて、みな一人前になり、

わたしが若いときにそうしたように、山にはいつては、鹿や熊などをどしどしとつてきては、食べさせてくれます。

そうやって、しあわせに暮らす日々を重ね、

わたしもいよいよ、年老いてきました。

いつ、死者の国へ行つても、おかしくありません。

そこで、わたしがどんな暮らしをしてきたのか、

幼いころ、沼地の魔女に妬まれて、さらわれたこと、

おまえたちのおばあさんが、死んで魂になつて会いに来てくれたこと、

おまえたちのおじいさんが、わたしを助けてくれたことを、

おまえたち子どもや孫たちに知ってほしくて、

こうやって話して聞かせたのですよ。